

報告

懇親会「札幌宇宙ぶれすと！」

～北海道からの『宇宙』の話をしよう～の開催

渡辺謙仁（北海道大学）

1. はじめに

北海道では、各地の天文台での天体観測、はやぶさが小惑星から持ち帰ったサンプルの分析、CAMUI ロケットの開発や大樹町での航空宇宙実験など、様々な宇宙に関する活動が行われている。また最近では、専門家による活動だけではなく、ソーシャルメディア衛星開発計画 SOMESAT[1]の道民メンバーの活躍など、市民による活動も活発になってきており、北海道が日本の天文学や宇宙開発などをリードする先進地域になる可能性も見えて来た。この流れを確実なものにし、北海道から日本の宇宙事業をさらに盛り上げていくためにはどうすれば良いかを考えるため、「札幌宇宙ぶれすと！～北海道からの『宇宙』の話をしよう～」[2]というブレインストーミングを、3月5日（土）に北大近くの居酒屋で実施した。このブレインストーミングでは、市民と専門家が一緒になって懇親会形式で熱く語り合い、緩い繋がりを作ることも狙っていた。

2. 告知

会の告知は、図1のようなチラシ[3]を作り、それを広く網を掛ける「網漁」的方法と、個別に声を掛ける「一本釣り」的方法を併用して配布することにより行った。

2.1 「網漁」的方法

広く網を掛ける「網漁」的方法としては、天文教育普及研究会、日本天文学会、日本天文愛好者連絡会の各メーリングリスト、著者

が所属する大学院の Web 掲示板、twitter での告知を行った。twitter での告知はその即時性を活かし、会の開始直前や、開始時、二次会の開始時にもその場で撮影した写真も使いながら行い、飛び入り参加を促した。

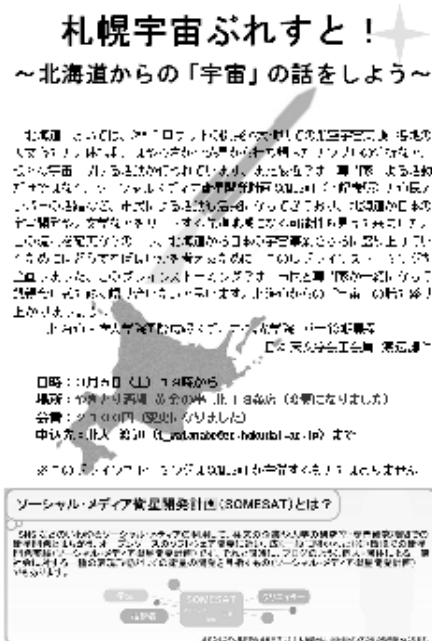


図1 配布したチラシ[3]

2.2 「一本釣り」の方法

特に来て欲しい人に個別に声を掛ける「一本釣り」的方法としては、メールや twitter の返信機能を使った呼び掛け、研究室への直接訪問を行った。

3. 当日

図2は会の開始時の写真である。参加者の3分の1が外国人という、国際色豊かな会と

なった。北海道から日本の宇宙事業を考える会として企画したが、これからは世界に目を向けるべきだろう。また、飛び入り参加こそなかったが、二次会も近くのカフェで 23 時半頃まで続いて大いに盛り上がった。話題も宇宙に限らず広く社会一般に及び、社会の中での天文学や宇宙開発の位置付けを再確認できた。



図 2 乾杯！

4. 反省とまとめ

会は大いに盛り上がったが、参加者は思ったほど集まらなかった。その理由として、テーマとゲストが不明確だったこと、他の宇宙関連イベントの情報収集が不十分だったことの 2 つが挙げられるだろう。今回の反省を次のイベントの企画に活かしたい。

4.1 テーマとゲストが不明確

大学院生や教員など、宇宙を専門とする人にももっと参加して欲しかったが、思ったほど集まらなかった。専門家の参加動機を形成するには会のテーマが曖昧過ぎたものと思われる。面白い話が聞けたり出来たりすることへの期待が参加動機を形成することは、専門家に限らず一般市民も同様だと考えられるため、次のイベントではテーマをより具体的にしたい。また、「○○先生が来るなら参加したい」という方もいた。テーマとともに、ゲス

トも明確に設定することが重要だと思われる。

4.2 他の宇宙関連イベントの情報収集が不十分

著者らが企画した会の前々日には天文学の研究会の懇親会が、前日には宇宙開発の講演会の懇親会が北大で開かれていた。それらの会に参加してなお、著者らが企画した会に参加しようとする人はあまりいないかもしれない。今回の目的を達するなら、自ら懇親会を企画するのではなく、それらの会に乗っかるという方法もあっただろう。我々もそれらの会に参加することを広く告知した上で参加するのである。今回は事前の情報収集が不十分だったが、次のイベントでは他のイベントの情報もしっかり調べたい。

文献と注

- [1] 超小型衛星を打上げるために、インターネットユーザーが集まって始まった計画である。興味を持っている人は、日本のみならず海外にも存在する。詳しくは次の URL を参照のこと。<http://j.nicotech.jp/somesat>
- [2] 某政治哲学者の著書のタイトルへのオマージュであることは言うまでも無い。
- [3] 次の URL からダウンロード可能。
<http://bit.ly/dSUcF7>

渡辺謙仁